

あべこべにするイエス

(ヨハネ九・一〜四一)

「タイムマシン」「どこでもドア」タケコプター」。ご存知、漫画『ドラえもん』のひみつ道具たちであるが、絶対的な人気第一位は「もしもボックス」なのだそう。確かにこれさえあればなんでも願いを言えばすべてかなうのだから他の道具は不要だ。成程ではあるが、あの何ともレトロな外観だけは何とかならないかとも思う。そんなひみつ道具の中には当のドラえもん自身が使い方に悩む道具もある。その名も「アベコンベ」。それと触るとそのものの性質がさかさまになるといふものだ。しかしどう逆様になるかは予想がつかない。のび太の頭は良くなるが、ドラえもんの頭は足の位置にくるといった具合である。どう見ても有用とは思えない。

閑話休題。今朝の箇所はこの地上に

来たイエスがいかにか革命的なお方であるかがよくわかるところである。ルカ福音書の平原の説教に書かれているようにイエスは既存の幸せと不幸の概念をひっくり返したお方である。見えない目は開かれ、見える目は罪によつて閉ざされる。以下イエスのなした「あべこべ」物語に耳を傾けたい。

一・不幸なものは幸いを得る

この物語は「生まれつきの盲人のいやし」としてつとに有名な箇所である。イエスの弟子たちも(二節)、またユダヤ人たちも(三四節)この男の不幸と悲しみは罪に起因していると考え、彼にそれを聞かせていた。「生まれつき目が見えない」という過酷な現実に加え、「お前は罪人だ」と断罪されるのだ。彼の悲しみと苦しみはいかばかりだったかと思う。しかしこの彼の悲しみの人生はイエスとの出会いによつて中断した。本章の中にはこのいやされた盲人が自分の身に起こったことを語る箇所が三回(一一、一五、三一節)あるのだが、その三回のいずれもがイエスがしたことと彼が応答したことこの両方が書かれているところがある。確かにイエスは不幸な男に近づき、声をかけ、治療的行爲(一)を行つたが、同時にシロアムの池に行つて目の上に塗られた泥を洗い流せとも命じている。つまりイエスは応答を求めているのだ。この不幸な男は応答した。目の見えないままでシロアムの池に降り、目を洗うことを決意し実行したのだ。しかしなぜ彼は従えたのだろう。簡単である。他の選択肢が無かつたからである。従わないならそのまま。しかし従えば何かが起こるかもしれない。ならばやってみようと彼は主のことは信じ、その命令、即ちみこころを行ひ、

その結果「幸い」を得たのである。

二・幸いな者は罪に定められる

他方イエスを追い詰め、このいやされた男を会堂から追放したパリサイ人やユダヤ人たちとはどういう人たちだったのか。まず彼らは自らを真理の擁護者と自負していたし(二二節)、自らのモ―セの弟子と位置づけていた。また形式的に律法を守ることに汲々とし、安息日教令にかこつけてイエスを断罪しようとしていた。更に社会的に見れば彼らは当時の宗教界の指導者たちであり、民百姓からは一目置かれていた人物たちであつた。しかしどうだろう。彼らはなんと頑なだろうか。彼らは神の業をその目で見、その顛末を何度も聞いたのにもかかわらず、奇跡を行つたイエスとその業を信じることはついぞなかつた。なぜだろう。これまた理由は簡単である。それは信じることは何かを失うことを意味していたからである。イエスを信じ、彼をメシアだと告白すれば彼らは自らに定めたおきてによつて会堂から追放される。今まで守つてきたこと。既得権益。そう言つたことのすべて失う。だから彼らはイエスの奇跡に背を向け、逆に自らは見えると言ひ張つた。しかしそんな頑なな彼らに対してイエスは「あなたがたの罪は残るのです。」とダメ押しされた。もう一度言おう。彼らは確かに神

の業をみた。だがこの世の幸せや氣遣いに目が眩んでいた彼らにまことの光であるイエスの福音は届かなかつたのである。

* * *

怪物と綽名される「彼」は世界有数のコレクター。そのコレクションは金では買えない。オリンピックの金メダルだからだ。一個だつて難しいのに、彼はアテネで六、北京は八、ロンドンでも四つを獲得した。富も名誉も十二分に得たこの金メダルコレクター、マイケル・フェルプスの幸福を殆どの人は疑わなかつたろう。しかし彼の人生は迷走した。複雑な生育環境、度重なる薬物疑惑と飲酒が彼を蝕み、ついには自殺を考えるほど追い詰められた。どう見ても不幸、どん底である。しかしこのどん底で彼は光を得た。それは友人が持つてきた一冊の本を通してであつた。書名は *The Purpose Driven Life*。リック・ウォレン牧師によるベストセラーである。そして彼は知つた。彼の人生に真の目的を与える神と云う存在を。今回のオリンピックで彼は更に五つの金メダルを上積した。しかし彼の人生の勝利はその前に決まつていた。友よ、イエスのことばを聞き、それに従う時人生は変えられる。不幸は幸せに、悲しみは喜びに、嘆きは踊りに変えられるのだ。アーメン。